

填國治罪法序說

完

寫本
填國
治罪法序說
第五百八十一號
第十卷
完

第 六	第 三 架	第 六 號
--------	-------------	-------------

司法省
第三四號
寄贈圖書文庫

B620
S 1
12





B620
S 1
12

司姓名記
B870
86-84
A.C.

奧國治罪法序說

墾國治罪法序說

余輩ノ翻譯セシ所ノ墾國治罪法ハ即千八百七十四年一月ヨリ施行セシモノナリ(但シ墾地利ニ於テ之ヲ施行シ匈牙利國ニ及ホスヲ得ス)蓋シ第十九紀ノ始メヨリ墾國ニ於テ治罪法ヲ改正廣告セシコト凡テ四回ト為ス而シテ此治罪法ハ實ニ第四回ノ改正ニ係ル夫政治ノ改竄ハ刑律上ニ變動ヲ生出スルハ識者ノ普ク理解セシ所ナリ故ニ政治沿革ノ多キ墾國ニ於テ屢々治罪審査ニ関スル法律ヲ改正セシハ毫モ驚怪スルニ足ラカル所ナリ七十年來各種ノ法典ヲ以テ該國ヲ管治セリ即千八百三年千八百五十年千八百五十三年及七千八百七十三年ノ

法典是レナリ

此最後ノ立法ハ詢ニ盛大不刊ノ典ト謂フヘシ
蓋シ千八百六十七年来墺国立法ノ諸部ニ就テ
許多ノ改革ヲ為シタル自由ノ精神ヨリ生出セ
シモノナリ余輩該法典全部ヲ翻譯シ且ツ註解
ヲ附加シ以テ緊重ナル成規ヲ明白ニシ讀者ヲ
シテ眼目ヲ著大ナル改革上ニ誘致セシメント
冀望ス因テ余輩ハ此ニ該法典ノ或ハ舊来ノ法
典ニ違及シ或ハ佛國治罪法ノ主義ト齟齬セル
部方ヲ簡明ニ論述シ以テ注目セシム他ハ敢テ
贅言セサルナリ

此序説ノ要旨ヲ分別シテ三章ト為ス

第一章ハ千八百三年千八百五十年及ヒ千八百

五十三年ノ法典ニ拠レル墺国治罪ノ查覈ニ係

ル
第二章ハ千八百七十三年五月二十三日ノ法典
編成沿革ニ係ル

第三章ハ新治罪法ノ要畧ニ係ル
第一章 千八百三年千八百五十年及ヒ千

八百五十三年ノ法典ニ拠レル墺国治罪
ノ查覈

千八百三年ノ犯罪法典ハ今時ニ刑法治罪法ヲ
併備セリ而シテ之ヲ分クニ大部トナス第一章ハ
犯罪ニ関シ第二章ハ警察法ノ至重ナル註違ニ関
セリ又其各大部ヲ分クニ二種トナス一ハ刑罰ヲ
定立シ一ハ治罪法ヲ設立セリ

千八百三十三年、該法典ハ治罪ノ部分ニ於テハ大抵前百紀、際墮國ニ施行セシ所、規則ヲ取用シ之ヲ擴充セシモノニ過キス何トナレハ該法典ハ書面審査ヲ許シ傍聴ヲ禁シ裁判官ヲシテ其職務ヲ以テ人ヲ拘留セシメ合法証拠ノ規則ヲ設立シ及ヒ陪審ノ設立ヲ拒止セリ
該法典ハ自由精神ヲ發揮スル者前後之ヲ駁撃セシト虽モ治罪法ニ関スル部分ハ要重ナル釐正ヲ加フルコトナク遂ニ千八百五十年ニ至ルマテ之ヲ施行セリ然ルニ千八百四十八年三月ノ政治沿革ハ大ニ民心ヲ誘進シ其極出板判決ノ為メニ陪審ヲ設立スルニ至リ尋テ千八百四十九年八月四日ノ帝王憲法ニ追テ(第百三條)面

審公議ノ主義及ヒ訴訟主義ヲ公告シ併セテ重大ナル犯罪ニ就テハ陪審ヲ設立スベキヲ約定セリ

即チ千八百五十年一月十七日ノ法典ハ此約定ヲ完終セシモノナリ

千八百五十年ノ法典ハ緊重ナル部分ニ於テハ日耳曼諸國當時ノ法典ノ如ク千八百八年ノ佛國治罪法ニ依憑セリ

嗣後千八百五十一年ヨリ漸次ニ論者ノ注目セシ改革ヲ該治罪法上ニ割致セリ即チ千八百五十一年十二月三十一日ノ法律ハ帝國全土ノ為メニ新治罪法ヲ開設シテ僅ニ其一部ノミヲ千八百五十年ノ法典ニ依憑スヘキヲ公告セリ而

シテ千八百五十三年七月二十九日布告セル新
法典ハ千八百七十四年一月一日ニ至ルマテ之
ヲ施行セリ

然レモ千八百五十三年ノ法典ハ又テ千八百三
年ノ法典ニ退復シ千八百五十年ノ法典中ニ施
行セシ間進ラ放棄セント曰フモ過言ニ非カル
ナリ蓋シ該法典ハ面審公議ヲ許可セシト虽レ
其公告諸項ヲ短縮セリ又法律ヲ以テ法庭ニ入
ルヲ許スハ千人ヲ定指セリ(第二百二十三條)而
シテ其他ノ者ノ出度ヲ許スハ裁判長ノ所見ニ
依リ壯年男夫ニ限ルトセリ

該法典ハ千八百三年ノ法典ノ規則ニ全復スル
ニ非スト虽レ合法証拠ノ主義ヲ取用セリ蓋シ
裁判官ハ被審人ノ事實ヲ証示セシモノト確認
スハキム場合ヲ定指セスト虽レ科刑ニ就テ要
用ナル証拠ノ最少ナル局限ヲ定指セリ
該典ハ全ク陪審ヲ廢止セリ後令出版犯罪ニ於
テストモ亦之ヲ傳ヘリ而シテ千八百三年ノ法
典ニ反シテ被審人ニ許スニ防護人ヲ以テスル
ト虽レ唯ク審理結終ノ後ニ非カレハ之ヲ用フ
ルヲ許リ、リキ

第二章 千八百七十三年ノ法典編成沿革
千八百六十年及ヒ千八百六十二年ノ伊國戰爭
ヨリ、後自由精神ノ發動シ及ヒ大ニ憲法ヲ改
革セシヨリ世人ヲシテ刑罪法ノ過謬就中最モ
治罪ノ錯誤ヲ猛省セシメタリレイヌテ

ノ民撰議院ハ千八百六十一年及ヒ千八百六十
二年ニ於テ屢々刑事審理ノ改革及ヒ陪審法ノ
設立ヲ為スノ緊要ナルコトヲ証示セリ初議皆
テ謂ラク此目的ヲ達スルノ方法ハ千八百五十
年ノ法典ヲ回復スルニ如カスト然レモ日ナラ
スレテ此議案ヲ拋棄セリ蓋シ千八百五十年ノ
法典ハ大ニ補充ス可キ缺典アリ又改訂重スハキ
過謬多シ元來佛國ノ法典ヲ模作セシモノナル
ヲ以テ日耳曼ノ刑法學ハ漸次該法典ノ精神思
惟ヲ駁許スルニ至レリ是ニ於テ學者ハ千八百
五十年ノ法典ヲ以テ徒ニ改定法ノ基礎トスハ
キノ議ヲ決セリ尋テ委員ヲ司法省内ニ置キ千
八百六十一年新法ノ草案ヲ起シ今年十一月之

ヲ編成シ議院ノ委員ノ評議ニ付セリ當時内閣
ノ更變アルニ會シ其事中絶ス千八百六十三年
ニ至テ再ヒ之ニ着手シ今年ノ春既ニ全備ノ法
案ヲ刊行セリ然レモ之ヲ真ニレハラスラレモ
ノ議院ニ致セシハ千八百六十五年ノ帝王ノ時
議ニ批ルヲ始メトナス當時内閣復々變動シ
法案モ亦種々更正ヲ加ヘタリ千八百六十七年
十一月二十八日ニ至テ遂ニ之ヲレハラスラレ
モ民撰議院ニ送致セリ議院ハ之ヲ主任委員
ニ致シ委員等ハ七拾二回ノ讀會ヲ經テ始メテ
千八百六十九年十月二十六日ノ報告書ヲ議院
ニ陳呈スルヲ得タリ該委員ノ法案ハ種々緊要
ノ各項ニ就テ政府ノ法案ト所見ヲ異ニスル所

多し民撰議院解散ノ期既ニ迫ルヲ以テ之ヲ討
論スルヲ得スシテ千八百七十二年ニ至ツテ遂
ニ此論題ヲ復議セリ

千八百六十七年十一月政府此法案ヲ議院ニ致
セシ以來至重ナル事件ヲ生出セリ蓋シ千八百
六十七年十二月二十一日ノ司法權ニ関スル帝
國ノ憲法ハ第十條及ヒ第十一條ヲ以テ墮國治
罪法ノ基由タルハキ主議ヲ設立セリ此二條ノ
旨趣則チ左ノ如シ

第十條裁判官ノ前ニ於テスル公審ハ民事刑
事ヲ論セス凡テ面質ヲ以テシ衆度ノ傍聽ヲ
許ス但シ法律ヲ以テ特別ノ場合ヲ定示スル
キハ此限ニ在ラズ刑事審理ニ就テハ訴訟ノ

方法ヲ施行スハシ

第十一條重刑ヲ科スハキ犯罪(但シ法律ヲ以
テ之ヲ定ム)輕重国事犯及ヒ出板ヨリ生スル
輕重犯罪ハ陪審ヲ設置シテ其罪ノ有無ヲ決
スハシ

千八百六十九年三月九日ノ法律ハ年ハ此主議
ヲ實施シテ出板犯罪ノ為メニ陪審法ヲ設立セ

千八百七十二年二月十六日司法卿グラゼール
氏ハ治罪法ノ法案ヲ民撰議院ニ送致セリ蓋シ
グラゼール氏ハ法案ノ編輯ニ任セシ諸委員ノ
報告者トナリテ極テ当初編輯ニ盡カセリ該法
案ハ大ニ千八百六十九年ノ民撰議院委員ノ法

案ニ類似セリ然レモ亦緊重ナル一事項ニ就テ
相異ナル所ナリ蓋シ千八百六十七年及ヒ千八
百六十九年ノ法案ハ當時民撰議院ニ送致セシ
刑法ニ符合スルト虽モ千八百七十二年ノ法案
ハ毫モ刑法ノ法案ニ符合セリキ而シテ刑法ノ
法案ハ先ツ停止セラレタリ之レカ為メニ新
治罪法ハ千八百七十二年三月十一日ニ民撰議
院ノ許可スル所トナリ千八百七十二年六月六
日之ヲ貴族院ニ致シ該院ハ千八百七十三年ノ
初メニ之ヲ投票セリヨリ千八百七十三年五月
二十三日帝王ノ允許ヲ受ケ因テ千八百七十三
年六月三十日帝國法律誌ニ公載シ以テ六個月
ヲ経テ即チ千八百七十四年一月一日ヨリ全国

必行ノ法ト為セリ且ツ全時ニ治罪法ニ附加ス
ヘキ二種ノ法律ヲ允可公告セリ即チ陪審人若
簿編成法陪審停止法是ナリ

第三章 新治罪法ノ要畧

千八百七十三年ノ法典ハ司法權上ノ法律第十
條及ヒ第十一條ニ定示セル大主議ヲ盡ク實施
セリト云フヘシ此大主議トハ即チ訴訟吟味公
然及ヒ面質吟味ノ主議及ヒ千八百六十九年ヨ
リ起立セシ陪審ノ編制是ナリ此等ノ主議ハ
固ヨリ新奇ノモノニアラス何ヲ以テ之ヲ言フ
トナラハ千八百五十年ノ英國法典及ヒ最前千
八百八年ノ佛國法典中ニ既ニ之ヲ掲載シタリ
キ然レモ千八百七十三年ノ今ノ法典中殊ニ天理

ニ吻合シテ最モ著シルキモノハ右ノ主義ヨ
リ脱胎セシ好結果トス実ニ墺國立法家ハ其識
認セシ方法ノ讚嘆ヲ受クルモ允当ナルコトヲ
自ラ感覺セシガ如ク何ントナレハ立法家ハ民
撰議院ニ致セシ報告書中若クハ討論ノ際ニ在
テモ屢々千八百五十年ノ法典及ヒ佛國法典ヲ
論難スルニ其確定セシ根柢ノ主義ニ就テ至理
適當ノ趣旨ヲ引出セリ

新治罪法ハ訴訟ノ主義ヲ許認セリ此主義ノ故
ヲ以テ裁判官ハ其職ヲ以テ犯罪ヲ摘発スルヲ
得スシテ訴訟人ヲ以テ裁判官ニ犯罪ヲ審理セ
シムルヲ得セシメタリ日耳曼ニ於テ此意趣ヲ
短簡ニ説明セハ談語アリ訴訟人アウケル地ニハ

裁判官アルコトナシ

此主義ヲ施行セシ千八百七十三年ノ墺國法典ハ
ハ二種ノ要點ニ就テ又大ニ注目スハキモノア
リ第一ハ訴訟權ヲ附与スハキモノ第二ハ立法
家訴訟權ヨリ生出セシ趣旨是レナリ

新治罪法ニ拠リハ檢事ハ訴訟ノ專權ヲ有セヌ
則チ許多ノ場合ニ於テ(第四十六條及ヒ其次條
被害者自カウ之ヲ保持スルヲ得

註違及ヒ輕罪ニ就テハ被害者ノ哀訴ニ依ラザ
シハ檢事ノ專斷ヲ以テ糾問セサルモノ多ク又

被害者ハ間接ニ訴訟ヲ為スコトナク直ニ刑事
裁判所(第四十六條)ニ之ヲ致スコトヲ得ハシ

千八百五十年及ヒ千八百五十三年ノ法典モ亦

右ノ場合ニ在テハ被害人ノ訴訟權利ヲ許可セ
リ然レニ輕罪ニ係ルハ被害人ハ先ツ換事ニ
稟告シ換事之ヲ拒絶セシニ非カルヨリハ此權
利ヲ施用スルヲ得ス而シテ千八百七十三年ノ
法典ハ換事ノ拒絶ヲ待ツテ要セス
又後取原告人ト稱スルモノヲ許可セシハ最モ
緊要ナルノ改革ナリ

蓋シ換事ハ一タヒ訴訟ヲ為セシ後ニ復ク之ヲ
放棄スルヲ得然ルハ裁判所ハ其審理ヲ停止
セザルヲ得ス然レニ千八百七十三年ノ法典ハ
民事原告人ヲシテ後取原告人ノ名稱ヲ以テ犯
罪ノ種類如何ヲ問ハス換事ニ承テ訴訟ヲ保續
シ刑罰ヲ請求スルコトヲ得セシム(第四十八條)

換国立法家ハ後取原告人ノ方法ハ亦弊害ヲ生
ゼンコトヲ疑懼セリ何トナレハ換事訴訟ヲ
放棄セシニ固ヨリ原告人ハ多少ノ損害ヲ受ケシ
ヲ以テ其再訴ハ裁判官抑制ノ憂ヘ無キニシモ
アラス故ニ成ルカテ之ヲ豫防センカ為メニ千
八百七十三年ノ法典ハ當初ノ審理ヲ經スシテ
直ニ裁判所ニ訴訟ヲ為スコトヲ民事原告人
ニ禁止シ且ツ社會ノ利益ヲ妨害スヘキヲ防ク
カ為メニ換事ヲ以テ後來訴訟ノ施行ヲ監督セ
シメ若シ本人復ク之ヲ放棄セシハ換事之ヲ
主任スルヲ得ヘシ(第四十九條)
換事及ヒ原告人ハ自ラ訴訟ノ本主ナリ是レ立
法家ノ訴訟主義ヨリ引出セシ至重ナル結果ノ

一ツリ若シ換事若クハ原告人ハ審理裁判官又ハ裁判所ニ訴訟ヲ為セシ後々復々之ヲ放棄セシハ裁判官又ハ裁判所其審理ヲ廢止スルヲ要ス

審理中訴訟ヲ放棄シテ裁判所ノ審査ヲ廢止セシムルノ權利ハ突ハ原告人ニ至重ナル權勢ヲ附加セリト為スハ此又訴訟主義ニ依テ他ノ一改革ヲ為シ審理及ヒ吟味ノ結終ニ就キ原告人ニ最上ノ權利ヲ附与セリ何リヤ蓋シ千八百五十年及ヒ千八百五十三年ノ法典ニ於テハ審理裁判官ノ決議(事件送致ノ決議)ヲ以テ裁判所ノ判決ヲ要セシト虽モ此法典ハ原告人ヲ以テ其編輯スル所ノ訴訟書ヲ直キニ裁判所ニ呈致シ

判決ヲ請求セシム(第二百七條及ヒ其次條)何トナレハ立法家ハ原告人訴訟ノ本主タルカ故ニ其訴訟ヲシテ當初司法決議ニ附屬セシムルハ至理ニ合ハスト思惟セリ而シテ其事件送致ノ決議ヲ廢止セシハ徒ニ理ニ合ハスルノニ非ス立法家ハ之ヲ以テ彼ノ裁判所ニ被審人ヲ送致ス可キ司法ノ決議ヨリ生出シ易キ犯人ノ損害ヲ豫防スハント思惟セシナリ然レモ原告ノ訴訟書ハ未タ確定ノ性質ヲ有セシモノト為ラス而シテ被審人ハ此訴訟ニ對シ抗禦ヲ為スコトヲ得ハシ(第二百八條及ヒ其次條)而シテ其抗禦ノ理不理ヲ換查スル所ノ控訴院ハ訴訟狀ヲ認定シ或ハ其事項ヲ取捨シ或ハ

全ク訴訟状ヲ放棄スルヲ得ハシ則チ第一第二
ノ場合ニ在テハ控訴院ノ議ヲ以テ訴訟事件ヲ
裁判所ニ送致シテ審理ヲ為サシム然レモ立法
家ハ被審人ノ損害(直接又ハ間接ニ生スル)ヲ豫
防センコトヲ猛省セリ何トナルハ抗禦ヲ還卻
シ訴訟状ヲ確認セシ所ノ判決ヲ法廷ニ於テ公
然朗讀スルヲ許サス但々其判決部分中ノ訴訟
状中ノ事項ヲ放棄セシヲ以テ犯人ノ利益ニ関
セシモノニ限り之ヲ明讀セシム(第二百四十四
條)
訴訟状ハ法廷ニ於テ公然之ヲ朗讀スルヲ法ト
ス然レモ証人ノ思惟上ニ多少ノ感覺ヲ与ヘ
ンコトヲ恐ルカ故ニ証人退出セシ後チニ非

カレハ之ヲ朗讀スルヲ許サス(第二百四十四條)
防護人ノ輔佐ヲ受クヘキ被審人ノ權利ハ訴訟
主義ニ在テハ殆ント已ヘカヲサルノ要旨タリ
何トナレハ原告人アリテ防護人ナキハ糾問
ト防護トノ間ニ不權衡ヲ生スルヲ以テ之ヲ防
クカ為メニ防護人ヲ具備セシムルハ勿論適理
ト云フヘキナリ

是故ニ千八百七十三年ノ法典ハ被審人ニ許ス
ニ防護人ヲ採用スルヲ以テシ又重罪裁判院ノ
審理ニ條ル犯罪ハ官必ス防護人一名ヲ附与ス
ルヲ要セリ其防護ニ関セシ法典ノ成規中最モ
注目スヘキモノハ防護權利ヲ審理ニ附与スル
ノミナラスニテ審理中ニ於テモ亦之ヲ許可セ

一年ナリ最モ防護人ハ審理ノ際ニ方ツテ被審
ノ糾向ヲ傍聴スルヲ得ス(第九十七條)ト虽トモ
法廷外ニ在テハ常ニ被審人ニ忠告ヲ為シ教諭
スルコトヲ得且ツ法典ハ特ニ防護人ニ附与ス
ルニ審理ノ書類ヲ見知スルコトノ權利ヲ以テ
セリ(第九十五條)是レ皆テ立法家ノ審理中ニ於
テモ亦訴訟審理ノ主義ヲ施行セシヲ顯明証示
スルニ足ルハシ

又被審人尺席ノ際裁判ヲ為スヲ許スハ特別ノ
場合ニ限ルトス而シテ具是ヲ掃却ナルハ蓋シ
亦立法家ノ防護權ヲ貴重セシ所以ナリ法典ノ
真意ヲ推測スルニ被審人ヲ同質セスシテ之ヲ
刑ニ処スハカラサルナリ但シ裁判所ノ呼喚ニ

從順セリル者ヲ罰スルハ理ノ當レルナリ及ケ
テ八百七十二年ノ法典モ亦斯ノ如ク者ニ對シ
テ民權ヲ剝奪セリ然ルト虽モ司法ノ命令ニ違
反セシヲ以テ犯人ヲ同質セズ防護ヲ為スヲ得
サルノ前ニ於テ之ニ犯罪ノ刑ヲ科スルハ豈ニ
之ヲ適理ト謂フハケンヤ

英國法典ハ糾向開始ニ至ルマテ訴訟ヲ保持ス
ルヲ許可セリ然レモ五年以内ノ自由剝奪刑
ヲ科スハキ輕犯罪ニ非ケルヨリハ糾向着手後
判決ニ至ルマテ訴訟ヲ保持スルヲ得ズ此場合
ニ在ルト虽モ犯人自ラ呼喚狀ヲ受ケ換事ヨリ
判決ニ至ルマテ訴訟ヲ保持スルコトヲ請求ス
ルヲ要ス且ツ主任ノ裁判院ハ犯人不在ヲ以テ

事實ヲ察見スルヲ得スト認ムルハ何時ニテ
モ審理ヲ停止スル之権ヲ有ス(第四百二十七條)
千八百七十三年ノ法典中ニ公廷審理ノ主義ヲ
取用セシハ則チ千八百五十年ノ法典ニ復歸セ
シテリ蓋シ千八百三年ノ法典ハ秘密審理ヲ許
諾シ千八百五十三年ノ法典ハ猶タ公廷審理ヲ
許可セシト居ル其分限甚タ狭少ナリキ然ルニ
新法典ハ其分限ヲ開放シテ全ク公廷審理ヲ許
可セリ

又千八百七十三年ノ法典ハ面質ノ主義ヲ布告
セリ此主義ハ既ニ千八百五十年及ヒ千八百五
拾三年ノ法典ヲ以テ之ヲ許可セリト居ル千八
百七十三年ノ立法家ノ所見ニ據シハ旧法典ハ

此主義ニ就テ緊要ナル至理ヲ發見セザリシト
思惟セリ

審理ハ多ク記載ヲ以テ成立スルカ故ニ面質公
議ヲ以テ主トスルニ至テ裁判上第戴ノ地位ニ
降レリ而シテ陪審ニ關スル犯罪事件ニ非ラヤ
ルヨリハ其要用ヲ見ス故ヲ以テ裁判官ハ其審
理ノ事件ニ拘泥セシテ殘ニ公審中經驗セシ
事ヲ猛者セサル可ラス其拘泥ノ害ヲ防クカ為
メニ審理証人ノ調書ハ法律ニ特定セル場合
(第百五十二條)ニ非カレヨリハ法廷ニ於テ
之ヲ朝讀スルヲ得ス

煥國立法家カ面質審理ノ主義ニ根據セシ緊重
ナル要旨ノ一ハ控訴ニ關スル特種ノ規則タル

コト疑ヒナシ此規則ハ左モ論者ノ注目ヲ受リ
ヘキ取以アリ何トナシハ積年日耳曼諸國ニ於
テ討論セシ一大問題ヲ塙國治罪法草案ニ依テ
結終スルヲ得タトハナリ
塙國ノ法典ハ控訴ヲ為スヘキ場合ノ數ヲ減者
シ唯刑罰及ヒ民事利益ニ就テノミ之ヲ為スラ
許可セリ而シテ有罪ノ問題ハ控訴ヲ為スラ許
サズ即チ處刑人ハ控訴院ニ就テ放免ヲ受ケル
ノ控訴ヲ為スラ得ズ換事モ亦初告裁判院ニ於
テ放免ヲ受ケタル犯人ニ刑ヲ科セビク為メニ
控訴ヲ為スラ得ズ
立法家ハ有罪問題ノ控訴ニ而テ實審查ノ主義ニ
又違スト思惟セリ

蓋シ裁判官ノ事件ヲ認定スルヤ眼前ノ証拠ニ
按拠スルヲ要ス故ニ若シ有罪ノ控訴ヲ許スバ
ハ控訴判事ハ自ラ直チニ問質スル所ヲ以テ判
決スルヲ得スシテ審理裁判官ノ問質セシ所ニ
基テ決議ヲ為サ、ルヲ得ス後テ初告院ニ陳呈
セシ証拠人ノ陳述書モ控訴判決ノ際緊要ノ用
ヲ為スヘシ然ラハ大約書面審查ノ方法ニ復選
スルト謂フモ不可ナルナシ勿論控訴判事ハ再
タヒ証拠人ヲ問質スルヲ得ルト虽氏斯ノ如キ
片ハ控訴ノ審理遂次ニ延滞ニ而シテ多少ノ費
用ヲ要スルノ害アルハシ
且有罪ノ控訴ハ塙國ニ於テ許可セシ証拠法ト
相矛盾スル所アルハ立法家ノ注目セシ所ナリ

若し合法証拠、方法ヲ許用スル片ハ有罪ノ問題ハ即チ裁判官權利ノ問題トナリ法律ノ成規ニ照準シテ刑ヲ科スル為ニ要用ナル合法証拠アルヤ否ヲ換探スルヲ要ス然ル片ハ有罪ノ控訴ヲ許可スルモ理チキニ非ルナリ何トナシハ控訴裁判官ハ輒ク法律請求スル所ノ証拠アルヤ否ヲ察見スルヲ得、シ然レモ裁判官其感覺心ヲ以テ決議スルノ自由ヲ有スル片ハ有罪ノ問題ハ即チ事實上ノ問題トナリ控訴判事ハ初告裁判所ノ感覺ノ原由ヲ分明識ルコト能ハサルハシ右ノ如クナルカ故ニ合法証拠ノ方法ニ於テハ立法家ハ權利ノ問題即チ有罪ノ問題ヲ判決スルニ就テ控訴判事ニ信憑ヲ置クトモ

氏論者素ヨリ之ヲ非ナリトス然レモ全ク判事ノ思惟ニ委任スル所ノ事實ノ問題ニ至テ控訴判事ニ上位ヲ与フルハ吾輩以テ理アリトナササルナリ若シ此事實問題ノ判決スルニ就テ初告判事ハ十分信スルニ足ラストモ司法ノ組立及ヒ判事授任ノ方法ノ改革ヲ冀望セザル可ラスレイスモ左ノ議院ニ於テモ上ニ開列セル諸考案ハ控訴ノ問題ニ就テ討論ヲ尽セシモノタリ

余輩ノ陳述シタル所ノ控訴權ノ減縮ハ註違罪ニ就テハ之ヲ用フルヲ得ス蓋シ註違罪ハ地方裁判所ノ一名判事ノ判決ニ係ルヲ以テ犯人ヲ保護スルヤ充分編普ナラス故ヲ以テ立法家ハ

其保護ヲ補充センカ爲メニ控訴ヲ訴可セシナ
リ是ヲ以テ註違ニ就テハ有罪控訴モ亦其訴可
スル所トナリ其施行ノ場合ハ仏國ノ法典ニ於
ケルヨリモ一倍之ヲ擴張セリ何トテハ墺國
ノ立法家ハ註違罪ニ就テハ何刑ヨリ以下ハ之
ヲ控訴スヘカラスト定言セリキ(第四百六十
四條)
地方裁判所ノ判決ニ對スル控訴ト他ノ裁判所
ノ判決ニ對スル控訴トノ分別ハ立法家ラシテ
復々自ラ他ノ分別ヲ起立セシムルニ至ル即チ
一體ノ控訴ヲ判決スルハ公知ヲ要セスト虽モ
地方裁判所ノ判決ニ對スル控訴ニ限リ必ス公
然之ヲ判決セカルヘカラス(第四百七十二條)

控訴ノ原由ハ墺國治罪法ニ於テ佛國法典ヨリ
減少ナリト虽モ他ノ一點ニ於テハ仏國千八百
八年ノ治罪法ヨリ墺國法典ハ一層寬大ナルモ
、アリ蓋シ仏國ノ法典ハ重罪裁判院ノ決議ニ
對シテ控訴ヲ爲スヲ許サ、レトモ墺國ニ在テ
ハ初告裁判院ノ判決ヲ控訴シ得、キ場合ニ在
テハ重罪裁判院ノ判決ト虽モ亦之ヲ控訴スル
コトヲ得セシム(第三百四十五條)
控訴ハ之ヲ控訴院ニ陳呈スルヲ得此目点ニ就
テ立法家、千八百五十年ノ法典ヲ用ヒザリシ
原因ハ之ヲ推測スルニ難カラザルナリ第一ニ
重罪裁判所ノ決議ト裁判官ノミヲ以テ成立セ
ル他、裁判所ノ判決トノ分別スルノ理ナカル

へし何トナレハ他ノ裁判所ト虽凡合法証據ノ
方法ニ拘泥スルコトナク自己ノ感覺心ニ據テ
決議ヲ為スニ非スマ且ツ初告裁判院ノ決議ノ
控訴ヲ許可シ而シテ反テ重刑ヲ科スヘキ所ノ
重罪裁判院ノ決議ノ控訴ヲ許可セサルハ條理
轉倒センモノナラン蓋シ立法家此ニ見ルコト
アル歟

墺國法典ハ控訴ノ外上訴ノ方法中ニ破毀上告
并ニ再審ヲ許可セリ但シ此再審ハ我國ノ再審
願許ニ稍々類似セル所アリ吾輩後ニ之ヲ説明
セントス

破毀上告ニ於テハ上告ヲ受リル所ノ毀破裁判
院ノ權限ハ墺國ニ在テハ佛國ニ於ケルヨリハ

廣大ナルコトヲ注目セサルヘカラス蓋シ佛國
ニ在テハ大審院上告ニ係ル判決ヲ破毀セシキ
ハ自ラ其事件ヲ審理セシテ之ヲ他ノ一裁判
所ニ送致セサルヘカラス墺國立法家ハ及テ謂
ハラク斯ノ如クナルキハ大審院ハ有名無実ノ
職務ヲ有シ之カ為メニ多少ノ繁雜及ヒ遲滯ヲ
生スヘシト故ニ立法家ハ大審院ニ附咲スルニ
上告ニ係ル決議ヲ破毀セシ後ハ事宜ニ因テ自
ラ其判決ヲ擔任スルノ權利ヲ以テセリ(第二頁
八十八條第四項)

法典中刑事再審ノ名ヲ以掲載セシ上訴ノ方法
ハ取モ一種ノ別質ヲ有セリ蓋シ再審ハ審理ヲ
停止セシ後々新証據ヲ發見セシヲ以テ再々審

理ヲ開キ若クハ之ヲ保續セサルヘカラサルノ
場合ニ於テ請ホスル所ノ審査ヲ還復スルヲ謂
フナリ乃チ再審ハ全ク上訴ノ性質ヲ有スルモ
ノニ非ス何トナシハ再審ヲ為スハ未タ司法判
決ヲ為サ、ルノ前ニ在ルハナリ然レモ判決後
更ニ事實ヲ發見シ若クハ證據アルニ由テ一旦
最後ノ判決ニ係ル所ノモノヲ重復スルコトノ
上訴ノ方法ヲ稱シテ亦刑事再審ト謂フ此上訴
ノ方法ハ既ニ千八百五十年及ヒ千八百五十三
年ノ法典ニ由テ之ノ規則ヲ立テタリト雖モ千
八百七十三年ノ法典ハ一倍廣大ナル方法ニ就
テ之ヲ擴張セリ則チ之ヲ為スハキノ場合ハ甚
ク多數ニシテ最後判決ノ權威ノ主義ハ殆ント

狭小ノ分限内ニ退縮セシカ如ク然リ
再審ハ犯人ノ利益ノ為メ(第三百五十三條第三
百五十五條及ヒ第三百五十六條)又ハ其損害ノ
為メ若クハ犯人ヲ放免セシムル為メ若クハ犯
人ニ輕減ノ刑ヲ科セシカ為メ又ハ放免ニ係リ
レ被審人ニ科刑セシムル為メ又ハ一層ノ重刑
ヲ宣告セシムル為メ(第三百五十三條及ヒ其次
條)凡テ之ヲ為スヲ得レシ立法家ハ社會ノ安寧
法理ハ有罪ヲ刑シ無罪ヲ放免スヘキヲ要求ス
ルヲ以テ犯人ノ利益ノ為メ再審ヲ許スルハ亦
犯人ノ損害ノ為メニモ之ヲ許可スルハ固ヨリ
正理ニシテ至要ナリト思惟セシナリ
凡ソ上訴ハ法典ニ定示セル期限内ニ非サレハ

之ヲ為スヲ得ス然レモ新法典ハ定期内ニ其権
利ヲ施用セカリシ犯人ニ特別ノ恩典ヲ附與ス
ルヲ得セシメタリ蓋シ此恩典ハ旧來ノ法律ニ
掲載セカリシモノナリ即チ既滿期限ノ還典ヲ
本件ノ上訴擔任ノ裁判所ニ請願スルヲ得ル是
レトシ此請願ヲ為スニハ暫クモ停止スハカ
カル事故又ソテ之カ為メニ上訴ノ期限ヲ顧ミ
ルヲ得カリシヲ確信セサルハカラス(第三百六
十四條)

陪審ノ組立ハ吾輩ノ説明セシ如ク新法典ノ基
礎中ノ一タリ然レモ陪審ノ規則ハ新法典中ニ
之ヲ掲明セシテ特リ重罪裁判院ノ審理規則
ヲ開列セシメ陪審ヲ呼喚シテ判決ヲ為サシ

ムハキ犯罪ハ新法典施行上ノ法律中ニ之ヲ定
示セリ此法律ハ治罪法ト同日ニ(千八百七十
三年五月二十三日)布告シ陪審人名簿編成ノ方
法ヲ定示セリ又同時ニ布告セシ他ノ法律ヲ以テ
陪審臨時停止ノ事ヲ定メタリ

陪審裁判ノ規則ハ多クハ我國法典ノ規則ニ類
似セリ就中數種ノ事項ハ全ク英國治罪法新設
セシモノ世人ヲシテ注目セシムハ千成規アリ
公審終結及ヒ裁判院長ノ要略陳述ノ後ニ於テ
疑問ヲ陪審人ニ付授スルノミナラス換事請求
及ヒ防護人答辯ヲ為サ、ル前ト虽モ(第三百十
六條)証人及ヒ鑑定人ノ陳述ヲ終ルハ直チ
ニ疑問ヲ陪審人ニ為スヲ得、シ立法家ハ斯ク

ノ如クノ豫メ公審ノ分界ヲ定示セシコトヲ企
望セリ此事項ニ就テハ墺國法典ノ成規ト羅馬
ノ規則裁判トノ間ニ稍ニ相類似スル所アリ何
トナレハ羅馬ニ在テハ裁判長ノ付下セシ規則
ヲ以テ公審ノ分界及ヒ判事ノ権限ヲ豫定セシ
ナリ
院長ノ要畧陳述ハ新法典モ亦之ヲ保存セリ然
シモ院長ハ徒ニ公審ヲ要述スルニ止マラス且
ツ訴訟事件ノ法律上ノ種類ヲ陪審人ニ指示シ
併セテ疑問中ノ法語ノ意味ヲ説明スルヲ要ス
第三百二十五條院長ノ指示ハ原告若クハ被告
ノ請ニ由テ調書中ニ登記セサルハカラス何ト
ナレハ指示中ノ誤謬ハ後日破毀上告ノ原因ヲ

レハナリ(第三百四十四條第八項)
裁判長法廷ニ於テ上項ノ如ク説明ヲ為スト虽
モ尚ホ陪審人^ノ之ヲ明瞭ニ理解セサル事項アル
キハ裁判長ニ陪審評議室ニ於テ再ヒ精要ノ説
明ヲ為シシコトヲ請求スルヲ得、シ然ルキハ
院長ハ書記官及ヒ被告兩造(裁判所内ニ在ル片
ハ)ヲ同伴スルヲ要ス(第三百二十七條)原告人及
ヒ被告^ノ此席ニ參會スルハ實ニ一大要件ト謂
フ、ン何トナレハ院長陪審人ニ附與スル所口
ノ説明中ニ疑審誤謬アルハ原被之ヲ摘發シ調
書中ニ之ヲ登記セシコトヲ請求スルヲ得、ン
而シテ此際生出セシ誤謬モ亦院長ノ法廷ニ於
ケル誤謬ト同ク破毀上告ノ原因タルハ、(第三

百二十七條

陪審人、確認、如何ヲ論セス裁判院ハ之ニ續
テ必ス決議ヲ為スヲ要ス(埃國治罪法ハ赦免ノ
宜告ハ必ス裁判院ノ決議書ヲ以テスルヲ要シ
院長ノ辭令書ヲ以テスルヲ得ス(第三百三十四
條)此決議書ハ有罪不刑ノ決議ノ如ク之カ破毀
上告ヲ為スヲ許ス

陪審人ノ權限ハ治罪法施行上ノ法律特別ノ方
法ヲ以テ之ヲ決定セリ此法律ハ出板ヨリ生ス
ル輕重犯罪ハ一切陪審ヲ設立シテ裁判ヲ為ス
ハキヲ確定セリ然レトモ輕重國事犯及ヒ普通
犯罪ノ陪審裁判ヲ要スルモノハ其種類ヲ開列
セリ立法家ハ千八百六十七年十二月二十一日

靠

ノ憲法中司法權ニ関セシ第十一條ニ陪審ハ輕
重犯罪ノ最重ナルモノ、為メニ設立スト云ハ
ル主義ニ靠着セリ但シ最重ノ刑トハ禁獄五年
以上ノ刑ヲ謂フ勿論犯罪中ニ五年以上ノ禁獄
ニ係ル者アリ五年以内ノ禁獄ニ係ル者アルヲ
以テ立法家ハ訴狀中ニ禁獄五年以上(五年ヲ含
蓄ス)ノ刑ヲ要求セシ犯罪ニ非サルハ陪審ノ權
限内ニ在ラスト論定セリ(治罪法施行上ノ法律
第六條)

陪審人名簿編成ノ方法ハ千八百七十三年五月
二十三日ノ法律ヲ以テ之ヲ制定セリ此法律ノ
布告ハ治罪法ト同日ヲ同フセシト(埃國治罪法ニ
先タケテ之ヲ施行セリ)即チ布告本日ヨリ千八

百六十九年三月九日ノ法律ニ依テ出板犯罪ヲ
擔任スルハキ陪審ニ就テ之ヲ施行セシメタリ
該法律ハ第一ニ陪審人タルヲ得ル為メニ具備
スルキ要件ナル性質方法ヲ揭示セリ
法律第一條ヲ見ルニ陪審人タルニ要件ナル事
項ヲ掲ケル左ノ如シ 一 齡三十年以上ナルコ
ト 一 一イテスラ一テエノ民撰議院代議士ヲ
出セシ諸國ノ人民タル權利ヲ有スルコト 一
滿一年以上該區ニ住居セシ者 一 人口三万以
下ノ區ニ在テハ直税十フロラン以上ヲ出スニ
堪ハタル者其他ノ區ニ在テハ二十フロラン以
上ヲ出スニ堪ハタル者但シ代言人代書人大中
學校ノ教師公立大學校ノ博士タル者ハ定税ヲ

納ムカルモ亦陪審人タルヲ得ハシ
又陪審人タルノ權ヲ失スルモノヲ揭示セルコ
ト左ノ如シ 一 身体又ハ精神ノ恒疾アリテ其
職ニ堪ハサル者 一 全ク民權ヲ有セサルモノ
一 司法官其負債者タルヲ公告セシ者(即チコ
ンモスルハルフルン(身代限リノ一種)ニ係者ハ其
結尾ニ至ルマテ又身代限ノ商人ハ千八百六十
八年十二月二十五日ノ法律第二百四十六條ニ
依テ定示セル權利ヲ回復スルニ至ルマテ 一
審理ニ係リ糾問ヲ受ケ或ハ刑罰ニ処セラルモ
一 處刑ニ罹リテ其撰舉權ヲ剝奪サレシモ
一 但シ復權ヲ受クルハ此限ニ非ラス
陪審ノ職ヲ兼務スルニ故障アルモノ左ノ如シ

一在職ノ諸官吏 一海陸軍人及ニ在職ノ国民軍若クハ不在職タリトモ給料ヲ受ケテ家居スル者 一軍務ニ関スル属吏 一教道ノ職及ニ官ノ許可ヲ受ケタル宗教會社ノ役僧 一小學校教師 一驛道鐵道傳信諸局若クハ汽船局ノ属吏

陪審ノ職ヲ除免スルモノ左ノ如シ 一齡滿六十年以上ノ者 一邦會帝國内諸邦ノ公會ヲ云フ帝國公會及ニ諸公會ノ代議士同會ノ間 一反令在屯セスト虽モ軍務ニ充ツル者 一帝室ノ用ヲ務ムル者 一公立學校ノ教師 一内科医外科医但シ藥館主ハ區長ヨリ其主職ヲ要セシラ公告センハ其翌年陪審ノ職ヲ除免ス

一陪審若クハ陪審補ノ職ヲ一回全勤セシモノハ翌年中之ヲ除ク 陪審人名簿中ニ本源名簿毎年名簿每會名簿事件名簿ノ別ヲリ注目セラルハカラス 區長ハ自ラ區會議員二名ヲ撰挙シ毎年十月ノ初メニ區内ノ陪審人タル權ヲ有スル者ノ人名簿ヲ編成ス此名簿ハ期日ヲ定メ之ヲ區務所ニ貼示シテ其權利ヲ有スル者ヲシテ告訴ヲ為スヲ得セシム此告訴ハ之ヲ區長及ニ區會議員二名ヲ以テ結立スル所ノ委員局ニ呈致スルモノトス十月ヲ限リ改正ノ人名簿ヲ裁判區ノ長吏ニ送致シ其規則ニ及スル所アルハ長吏ハ之ヲ區長ニ指示シテ釐正ヲ為サシム若シ區長障碍

アルハ長吏自テ之ヲ警正ス、シ而シテ裁判
區長吏ハ其管内ノ陪審人名簿ニ其書類ヲ附シ
テ初告裁判院長ニ送致シ且ツ此人名簿中知識
德義性質ノ篤実ナル剛毅ナル數種ノ國語ヲ解
スル等(數國ノ方語ヲ通用スル國ニ在テハ最モ
衆ニ超ヘテ陪審ノ職ヲ勤ムルニ適當ナリト認
定スルモノヲ指示ス、シ
初告裁判院長ハ陪審人名簿ヲ括集シ十一月中
ニ特別ノ委員ヲシテ管内ノ毎年名簿ヲ編成セ
サルハカラス此委員ハ初告裁判院長若クハ其
代理人及ヒ初告判事若クハ地方判事申ヨリ撰
舉セシ判事三名及ヒ人民ノ名望アルモノ三名
ヲ以テ之ヲ結立ス但シ此委員ハ初告裁判院長

皆之ヲ撰任ス委員長ハ其集會ヲ其國ノ政府ニ
報知シ政府ヲシテ代理人ヲ派遣スルヲ得セシ
ム代理人ハ所見ヲ陳述スルヲ得ルト虽モ投票
ニ関スルヲ得ス

陪審人名簿ニ関シ告訴ヲ為スモノアルハ委員
之ヲ検査シ尋テ陪審人毎年名簿及ヒ陪審補每
年名簿ヲ論定ス此名簿ヲ論定スルニ就テハ其
最モ陪審ニ適當セリト信認スル所ノ者ヲ撰拔
スルヲ要シ且ツ陪審補名簿ハ重罪裁判院所
在地ニ住居スル者ノミヲ取テ之ヲ編成スルヲ善
シトス

出板犯罪ニ関スル千八百六十九年五月九日ノ
墮國法律ハ仙國ノ法律ト大ニ異ナル事項アリ

蓋シ填國ニ在テハ名簿ニ記載スヘキ陪審人ノ
數ヲ定ムルハ仙國ノ如ク人口ニ原ツカスシテ
翌年ノ必須ナル數ヲ推測シテ之ヲ定ムル是レ
ナリ凡テ各人名簿ニ記載スヘキ陪審人ノ數ハ
平常及ヒ臨時集合ノ為メニ必須ト推測スヘキ
人員ノ一陪ト為ス

右ノ規則ヲ遵守シテ人名簿ヲ編成スルハ人
員不足ヲ生スルコトアリ故ニ一裁判管内ノ人
名簿通計八百名ニ達セリルハ初告裁判院長
其撰任セシ特別委員ノ集合セリルニ先々各
區長ニ命ジテ追加名簿ヲ編成セシムルヲ要ス
而シテ追加名簿ニ記載スヘキモノハ直稅五フ
ロラン以上ヲ納ムルモノヲ取リ最モ陪審人々

ルニ緊要ナル事項ヲ具備スルヲ要ス

右ノ方法ニ依テ編成セシ毎年名簿ニ拠テ又毎
會名簿ヲ編成ス嘗テ民撰議院ニ送致セシ政府
ノ法案ハ每會名簿モ亦毎年名簿ノ如ク特別委
員ヲ置テ之ヲ編成セシムヘント去ヘリ然レモ
民撰議院ハ選撰法ヲ以テ每會名簿ヲ編成スル
キハ自ラ陪審人ノ不羈ヲ妨碍スヘント思惟セ
リ故ニ抽籤油ヲ以テ之ヲ編成スルニ決議セリ
陪審集會ノ前十五日初告裁判院ニ於テ判事ニ
名及ヒ換事ノ參生ニテ公然抽籤法ヲ行ヒ每會
名簿ヲ定メ又抽籤ノ時日ヲ代官人事務局ニ報
告シテ其社員一名ヲ派遺參會セシムルヲ得セ
シム

又各事件ニ就キ抽籤ヲ以テ陪審組ヲ結立ス其
方法規則ハ新法典中ニ之ヲ明載セリ(第三百四
條及ヒ其次條)

重罪裁判院ハ陪審人ヲ設クルノミニ止マラス
且ツ仙國ノ如ク三名判事ヲ置ク重罪裁判院長
ハ大体控訴院長ヲ以テ之ニ任セシメス多クハ
重罪裁判院所在地ノ初告裁判院ノ長ヲ以テ之
ニ任ス(第三百二十一條)蓋シ立法家ハ裁判官ノ
移轉ヲ豫防セシナリ何トナシハ移轉ハ判事ヲ
シテ空シク時日ヲ曠過セシムルノ害アリハナ
リ此方法ハ仙國ニ於テ各州ノ重罪裁判所ヲ管
セシムルニ控訴院所在地ヲ除クノ外ハ該院ノ
長ヲ以テセスシテ重罪裁判院ノ設置地ノ民事

裁判所ノ長ヲ以テスルノ方法ニ應当スハシ
重罪裁判所ノ判事ヲ三員ト定メタルハ最モ著
眼スヘキ要領ナリ何トナシハ陪審ノ權限ニ屬
セサル犯罪ヲ擔任スル初告裁判院ハ判事四員
ヲ以テ議ヲ決ス而シテ其所見相半スル片ハ犯
人ヲ放棄ス故ヲ以テ此判事ヲ四員トセシ偶數
ハ犯人ノ利益ノ為メニ之ヲ許可セシモノナリ
然レモ重罪院ノ如キハ陪審人アル片ハ判事ハ
罪ノ有無ヲ決スルモノニ非スシテ刑事ヲ擬定
スルヲ任スルカ故ニ立法家ハ投票ノ互半ヲ生
セシムヘカラスト思惟セリ

千八百七十三年ノ法典中ニ再審^審ノ結立ヲ許可
セシニアタリ民撰議院ハ後來其弊害アラシク

トヲ慮リ之シカ為メニ特別ノ法律ヲ投票決定
 シ千八百七十三年五月二十三日新法典及ヒ陪
 審人名簿編成ノ法律ト同時ニ之ヲ布告セリ此
 新法ヲ辨シテ陪審停止法律ト称ス
 陪審停止律ハ特別ニ定示セシ國內ニ於テ陪審
 ノ権限ニ関セ凡諸犯罪若クハ唯數種ノ犯罪ニ
 就テ陪審ノ實施ヲ停止セシムルモノナリ但シ
 此停止ハ一ケ年ヲ越スルヲ許サズ
 陪審停止ヲ為スヘキ場合アルハ各者ノ紳會
 合シテ大審院ノ所見ヲ問質シ然ル後之ヲ公告
 スヘシ但シ諸卿其責ニ任ス行法權ニ斯ノ如キ
 至大ナル處分ヲ委任シテ立法權ヲシテ之ニ関
 係セザラシメザルハ法律ノ固ヨリ望マザル所

ナリ^乃政府ハ此ノ命令ヲ布告スルヤ直チニ之
 ラレイヌ^五ラ^五ノ民振議院及ヒ貴族院ニ報
 告セザルハカラズ若シ議院分散中ナルハ次會
 ラ待テ之ヲ報告スヘシ而シテ議院ヨリ之ヲ要
 求スルハ何時ニテモ命令謄寫^寫送呈スルヲ
 要ス且ツ屢々陪審停止ヲ延推保續スルノ害ア
 ランコトヲ恐シ法律ハレ^五ス^五ラ^五テ^五議院
 再會ノ期ニ至ルマテハ之ヲ重複ニ若クハ延推
 スヘカラスト定言セリ
 陪審停止ヲ禁言セシキハ陪審停止ニ係ル犯罪
 ハ初告裁判院ニ於テ之ヲ擔任審理ス然ルハ
 判事ハ四名ヲ以テ定員トス而シテ死刑若クハ
 五年以上ノ囚獄刑ニ當ルハキ犯罪ニ関スルハ

ハ刑事六頁ヲ以テ之ヲ審理スハシ
新法典中ニ揭示セシ審査ノ諸規則ハ地方裁判
所ニ於テ一名ヲ判事註違罪ヲ審査スルニ於テ
モ亦概拜之ヲ施用ス然レモ註違罪ノ審査ト輕
重犯罪ノ審査トノ間ニ於テ數種ノ差異アリテ
其最モ著ルシモノハ上訴ノ順序ナリ蓋シ吾
輩既ニ之ヲ陳述セルコトアリシ如ク註違罪ハ
有罪ノ問題ト爲氏之ヲ上訴スルヲ得然レモ破
毀上告ヲ爲スヲ許ス何トナシハ上告ヲ許ス
ハキ原因アルハ初告裁判院ニ之ヲ控訴セシ
ムレハナリ
通常ノ裁判ニ於テハ犯人ヲ面質シ若クハ先ツ
呼喚状ヲ發遣セシ後ニ非ナレハ之ニ刑ヲ

科スルヲ得ス然ルニ註違罪ニ於テハ速決審理
ヲ爲スヲ得即チ呼喚状ヲ發遣スルコトナク又
ハ被審人未タ出廷セサルハ虽モ刑罰ヲ宣告
スルヲ得ハシ此種ノ吟味ハ日耳曼ノ諸國ニ之
ヲ施行シ称シテコンダスヘルフント云フ第
四百六十條及ヒ其次條蓋シ立法家ノ說ニ裁判
ヲ速決シ犯人ニ出廷ヲ辟ケシムルノ利益ヲ有
セシムルト雖モ後日不服ノ上訴ヲ爲スノ權ヲ
犯人ニ付與スルハ決シテ弊害ヲ構成スルコ
トナシト則チ此上訴ハ命令書發告ノ日ヨリハ
日ヲ限リ之ヲ地方裁判所ニ致スヲ要ス然レモ
ハ該裁判所ハ平常ノ規則ニ準シテ之ヲ審査ヲ
爲ス

法典ノ註遺罪ニ関スル方部中最重ナル問題ハ
裁判官結立ノ問題ナリ則チ千八百六十七年ノ
政府ノ法典草案ハ第四百七十六條(地方判事一
名并ニ区ノ参事二名ヲ以テ註遺罪ヲ換案セシ
メ同見ノ上判決ヲ宣告セシムル)ト決言セリ
然ルニ民撰議院ノ要旨ハ千八百六十九年ノ報
告書ヲ以テ参事裁判ノ主義ヲ駁撃セリ其説ニ
曰ク各種人貞ノ集合ヲ以テ裁判ヲ為スルハ決
シテ好結果ヲ得カラン且ツ参事裁判ハ一体ノ
判事ノ如ク不羈獨立ノ保護ヲ受有セスト墺國
法典ハ及チ千八百六十九年ノ要旨ノ所見ニ依
憑シテ参事裁判ノ主義ヲ許可セズ判事一名ヲ
以テ地方裁判所ニ於テ註遺罪ヲ判決セシム

ルニ決セリ

抑々臨時裁判所ハ墺國法典ニ於テハ之ヲ許可
セスト云フモ不当ニ非カルヘシ何トナシハ特
別ノ場合ニ在テハ犯罪ヲ吟味スル為メニ特種
ノ裁判所ヲ設置セカシハナリ

然レモ千八百七十三年ノ法典ハ第十八紀ノ中
葉ヨリ既ニ墺國ニ施行セシ規則ニ還復シテ非
常ノ場合ニ在テハ一層速決并ニ嚴酷ナル方法
ニ就テ裁判ヲ為スルヲ許可セリ此速決非常ノ裁
判ハ初告裁判院ニ於テ之ヲ擔任セシム然レモ
ハ該裁判院ハ陪審ノ權限ニ屬スル犯罪トモ
之ヲ主任シ名ケテ臨時裁判院ト謂フ此裁判所
十種ノ場合ニ當テ之ヲ同クテ得即チ聚衆行

兇アリテ平常裁判ノ方法ヲ以テ之ヲ懲罰シ得
 カルキ若クハ一區或ハ數區内ニ殺害掠奪放火
 若クハ暴行妄作シテ人心ヲ騷擾セシムル時是
 レナリ(第四百二十九條及第四百三十條)
 此裁判ヲ施行セジトスルキハ特別ノ發令ヲ要
 ス即チ聚衆行兇ノ場合ニ在テハ縣令ハ控訴院
 長及ヒ該院ノ換事ヲ協議セシ後チ之ヲ發令ス
 他ノ場合ニ在テハ内務卿ハ司法卿ト合議セシ
 後チ之ヲ發令スルヲ得
 此發令ハ犯罪地ノ初告裁判院ヲシテ陪審ヲ放
 棄セシ所ノ犯罪ノ裁判ヲ擔任セシム及令軍人
 ト虽氏該裁判院ニ於テ其罪ヲ審問シ而シテ裁判
 ノ速結ヲ要スルカ当メニ現行犯罪若シクハ速

カニ兼服セシムハシト認メタル罪人ニ非サル
 ヲリハ之ヲ該裁判院ニ拘致スルコトナシ然レ
 トモ此場合ニ於テモ一體ニ犯人ニ附與セシ保
 護權ヲ剥奪セサルハ贅言ヲ待タサルナリ
 裁判ハ凡テ公廷面質ヲ以テシ犯人ハ防護人一
 名ヲ具備スルヲ要ス若シ之ヲ具備セサルハ
 官之ニ一名ヲ指示セサル可ラス
 若シ列席裁判官一同犯人ヲ有罪ト發言スルハ
 ハ死刑ヲ宣告セサルハカラス死刑ヨリ輕減ス
 ル刑罰ヲ科スルハ唯特別ノ場合ニ在ルニ蓋
 シ臨時裁判院ハ五年ヨリ二十年ニ至ルノ禁獄
 刑ヲ科スルヲ得其場合左ノ如シ一犯罪ノ際
 滿二十年ニ至カウケル者一最重罪ノ犯人

一名若クハ数名ヲ死刑ニ處セシテ以テ既ニ社會ノ安寧ヲ回復スルヲ得シハ特別ノ情状ヲ酌量ス可キ最輕ノ罪人是ナリ然レモ若シ犯人特別ノ場合ニ在ラス且ツ判事一同科刑ヲ發言セザルカ若クハ三日内ニ判決ヲ為ス能ハサルハ臨時裁判院ハ其事件ヲ平常裁判院ニ送致セザルハカラス

臨時裁判院ノ宣告セシ死刑ハ其裁判ノ如ク速カニ之ヲ決行セザルハカラス決シテ該裁判所ノ判決ニ對シテ上訴ヲ為スヲ許ラス死刑ハ宣告後二時ニ之ヲ決行スルヲ要ス(第四百四十五條)

臨時裁判院ヲ同クニ特別ノ決議ヲ要スル如ク

之ヲ同ツルモ亦特別ノ決議ヲ要ス(第四百四十六條及ヒ其次條)

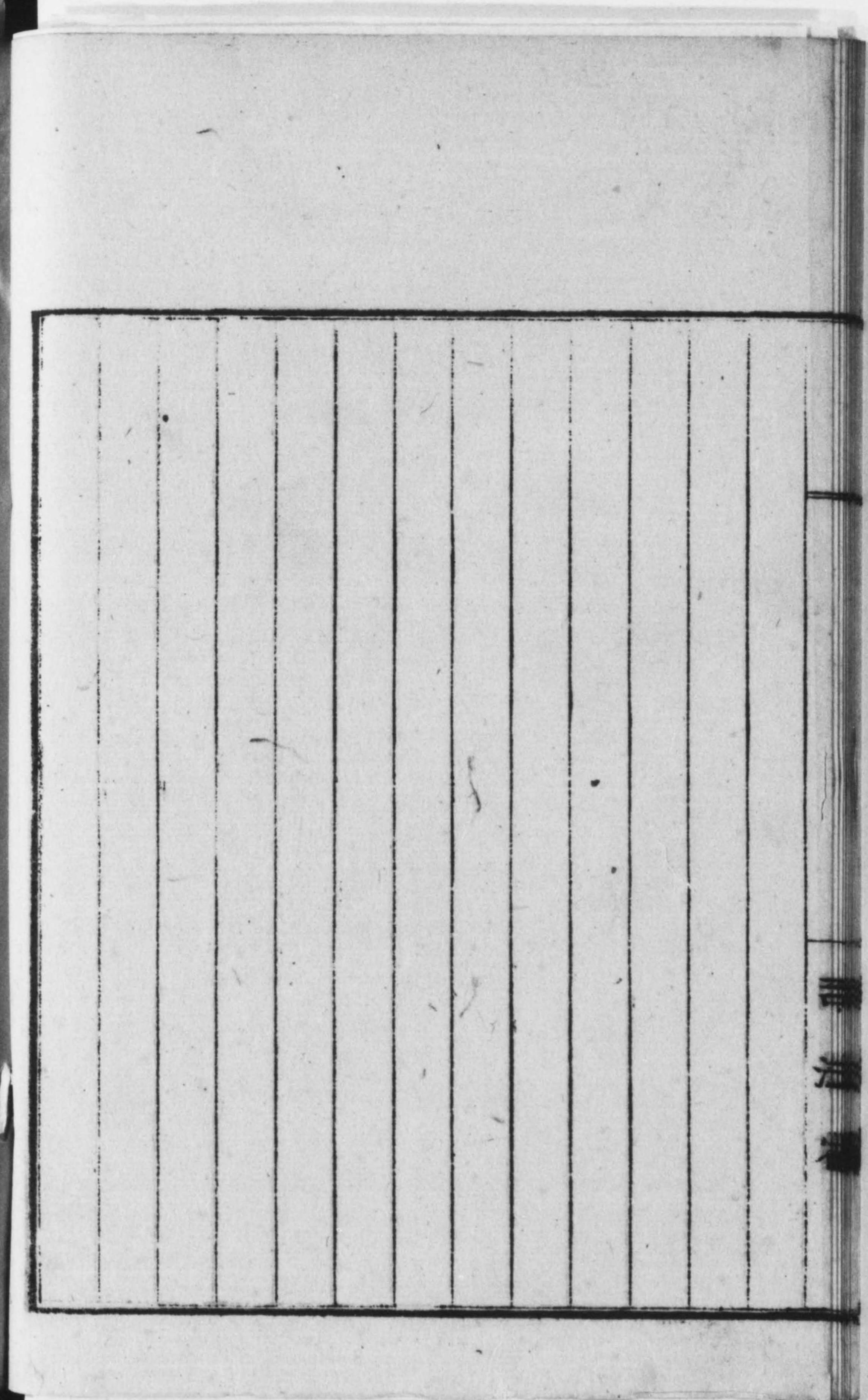
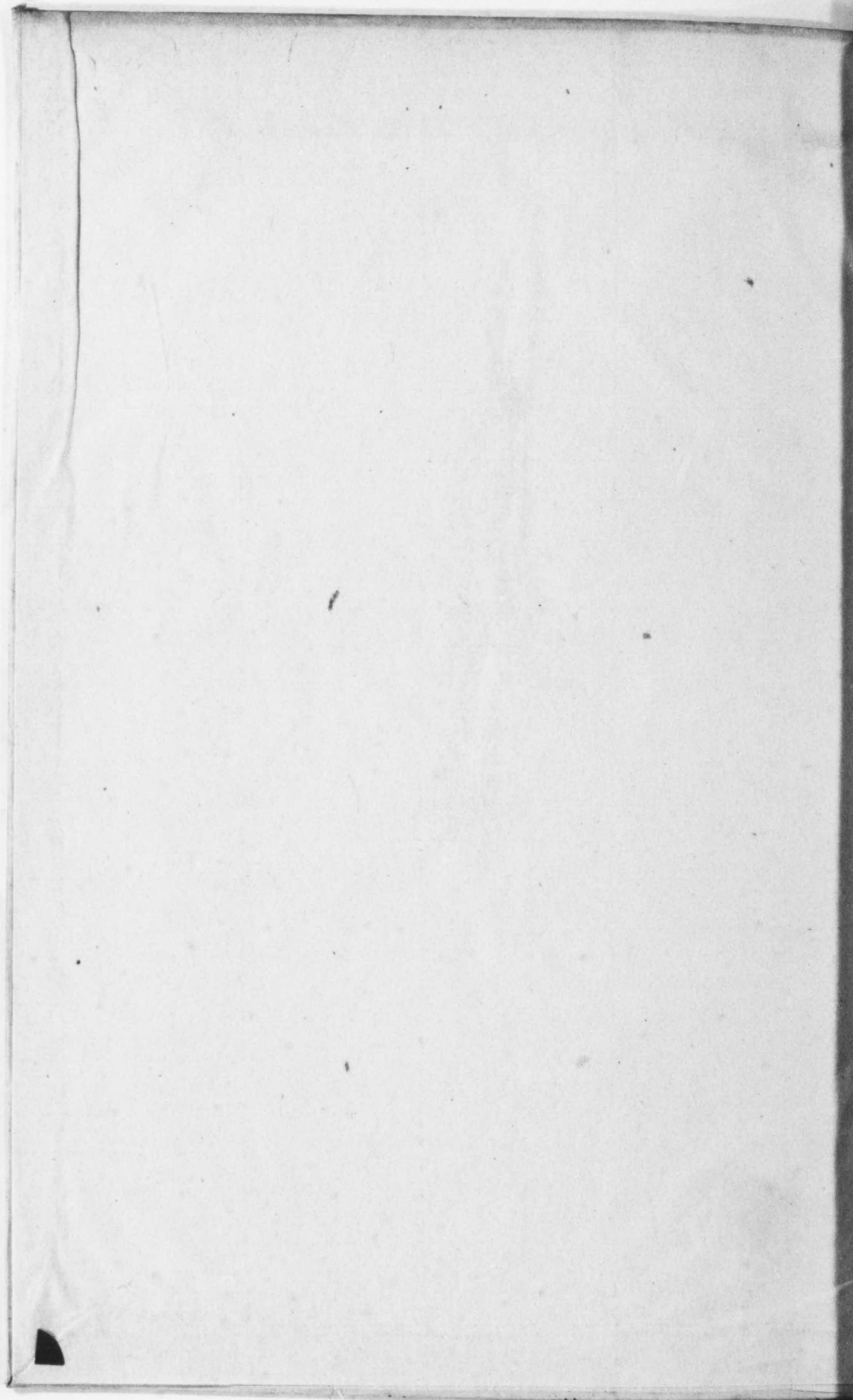
吾輩ハ此ニ千八百七十三年ノ墺國治罪法ノ註解ヲ終結セントス此至重ナル立法書中ニ於テハ固ヨリ無限ノ着眼ヲ要スルキ事項アルハシト虽モ吾輩今之ヲ概畧セリ何トナシハ讀者若シ吾輩ノ註解ヲ反覆シ以ツテ日耳曼原文ヨリ訳出セル該書ト之ニ附加スル所ノ註解トヲ熟讀スルハ其註解ノ不登ヲ補フヲ得ハシ

新法典ハ事項ニ因テハ緻密ニ其枝葉ヲ指示スルヲ以テ凡テ外國ノ法律ハ枝葉ヲ明示スルヲ以テ他國ノ法典ト其性質ヲ異ニスルモノ多ク殊更ニ原文ヲ熟讀スルヲ要スル所以ナリ審理

ニ就テ申ラヌハタル者ヨリ納ルハキ費用中ニ
算入スヘキモノヲ細々記載シ(第三百八十條及
ニ其次條)及ヒ殺害放火詐偽等ノ審理中ニ法官
ノ猛省スヘキ特別ノ規則ヲ緻密ニ指示セシ如
キ即チ是レナリ(第百二十七條)
千八百七十三年ノ法典ノ脱稿ハ現今在職ノ墺
國司法卿グラビール氏(維也納大學校ノ旧法律
學校官)ノ切最モ多キニ居ル此卓越タル刑律家
ニシテ司法卿ノ職ヲ以テ新法典ノ制作ヲ贊成
セリ而シテ其法業編輯ニ就テハ同氏ハ其著書及
ヒ臨時委員ノ職務ヲ以テ之ヲ輔翼セシカ其功
績實ニ大ナリキ
墺國ノ治罪法ハ實ニ千八百三十三年ノ法典ヲ

以テ大成セリ然レモ是レ唯ニ刑律中ノ一部ヲ
ルニ過キス其刑法ト称スルモノモ亦大ニ改革
セサルヘカラサルナリ
グラゼール氏ハ現今墺國刑律改革ノ大事業ヲ
竣成セリ則チ千八百七十四年十一月七日ノレ
イスチエラーキ民撰議院ノ集會ニ刑法ノ草案ヲ
呈致セリ蓋シ之ヲ以テ現今施行ノ千八百五十
二年ノ刑法ニ代用セント欲スルナリ

查理里温 加園氏識ス



冊
頁
號

